報告──平成23年新年会

# 仲間が集って和気あいあいと

**今年も1月29日土曜日の昼、東京の如水会館で新年会が開かれました。北は青森、西は熊本から駆けつけた周作クラブのメンバーが遠藤先生を囲ん（だつもり）で、楽しいひと時を過ごしました。**

冬型気圧配置で抜けるような青空が広がる東京・神田一ツ橋。午後1時の開会を目指して、周作クラブの会員が集まってくる。その数、およそ50人。会場には6つのテーブル席が用意され、参加者は籤引きで指定されたテーブルに向かう。次第に埋まって行く席、久しぶりの顔や初めての顔との会話が弾み、笑いがはじける。

午後1時、高橋千劔破幹事が司会の席に着き、加賀乙彦会長が体調を崩されて欠席と告げて、加賀さんからのメッセージを伝える。会長に代わって開会の挨拶に立ったのは黒井千次顧問。

黒井さんは「顧問は会長がいない時の代役だと言われたから引き受けたのに、何度も代役を勤めているような気がする」と会場を笑わせたあと、「遠藤さんは多少問題はあっても（笑）、陽気に生きてゆく人だった。考えてみれば、この会の中心になって動いている人も皆そうだ（笑）。新年会はこの会にとって年に一度の大きな催し。今日は楽しく」と挨拶。

続いて乾杯の音頭を指名されたのは元弘前大学学長の吉田豊氏。氏は「豪雪の弘前から出てきたが、昨日今日はとてもいい天気で、こんな日に新年会ができるのも遠藤さんのおかげだと思う。今年は卯年だが、『兎の坂登り』という言葉があるように、卯年は元気な年。皆さん元気に過ごしましょう」と述べ、乾杯の音頭を取る。

金屏風を背に勢ぞろい

ここでしばらく食事の時間になる。バイキング方式で食べ物をテーブルに運び、どの席でも食べながら飲みながらの歓談が弾む。テーブルを移って話し込む人もいる。

小一時間後、司会が亀岡園子さんに代わり、まずはお知らせの時間。加藤宗哉幹事から、4月23日から横浜の神奈川近代文学館で行われる「遠藤周作展」は質量とも過去最大級の展覧会で、たくさんのイベントも行われること、その会期に合わせて周作クラブの「遠藤周作・原点の旅」も5月22・23日に横浜・鎌倉を訪ねる形で行われることが発表され、旅行への参加、文学展への訪問が呼びかけられる。

次はお楽しみのビンゴ・ゲーム。最初は通常のビンゴ、亀岡さんの軽妙な司会進行で、会場は盛り上がる。真っ先にビンゴ！と叫んだのは八王子市から参加の前田孝子さん。喜ぶ彼女の手に亀岡さん工夫の景品が渡される。前田さんに続き次々とビンゴ！が出て、景品が半分ほどになったところで、ゲームは一旦中止し、当たらなかった人を対象に再スタート。但し今度は最後まで自分のカードの数字が読み上げられなかった人に最高景品が当たるという変則ビンゴ。一度も数字が出ない人が次第に減って行き、残ったのは黒井さんともう一人。最後の数字が読み上げられると、黒井さんの「あっちゃった！」の声。見事残ったのは秦野市から参加の山田和枝さん！

ゲームは終わり、ここで新年会初参加者が紹介される。熊本市の安川一絵さん、埼玉県久喜市の羽田澄子さん、香川県三豊市の香川純子さん、神奈川県南足柄市の大石こずえさんの四人がマイクを向けられ、入会の経緯など、自己紹介をする。

そしてまたしばらくの歓談・飲食の時間を経て、2時40分、閉会の挨拶に宮辺尚幹事が壇上に上がる。「今年の新年会は歌舞音曲もビデオ鑑賞もなかったけれど、その分会員同士ゆっくり話せたのではないでしょうか。今年も勉強会や原点の旅、周作忌でまた顔を合わせましょう」と述べ、更に樹座から生まれた「殺陣クラブ」公演の宣伝をして壇をおりる。

手早く片づけられるテーブル、セットされる椅子。最後は参加者全員が並んでの記念撮影、金屏風を背に勢ぞろいしたどの顔も楽しそうだ。

**記・宮辺尚／写真・田村百合子**